

## 「2019年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール参加報告書」

京都大学文学部2年 水野貴文

**1. 学習成果・海外での経験について**

今回のサマースクールを通して私が学んだことは、「自分の外側について」と「自分の内側について」の2種類に大別できる。

まず前者についてだが、これを説明する上でチュラーロンコーン大学生(以下、チュラ大生)との交流について言及せずにはいられない。彼/彼女らは滞在期間中のほとんど毎日、授業が終われば我々京都大学生を大学周辺のあちこちの遊びやご飯に連れて行ってくれた。チュラ大生の日本語力は驚くほど高く、日本語での会話を通してすぐに打ち解け合うことができた。しょうもない話から真面目な話まで色々なことを話して、多くの時間を共有することで、わずか2週間という短い期間ではあったものの、互いについてよく知り合い、強い関係を築くことができたと思っている。今後、タイに関する何かしらの報道を目にすれば、彼/彼女らのことを思わずにはいられないだろう。こういったある種の「つながりの感覚」は、何もタイに限定された話ではない。これまでは国外のニュース(政治、紛争、事件など)が報じられても、自分とは切り離された世界で起きている、どこかリアリティの欠けた出来事のような感があった。そこには人がいて、生活しているというごく当たり前のことに対する想像力が欠けていたのだろうと思う。チュラ大生との交流というひとつの経験を通して、自分自身の延長線上に海外があるような感覚を得られたことは、私自身の意識の大きな変化であり、財産となった。

続いて後者について説明する。私にとって、2週間海外の同じ場所に滞在し続けるという経験は初めてであり、徐々に現地に順応していった一方、生活スタイルの違いや言語の壁は最終日まで常に突き付けられた。またチュラ大生との交流の中で、普段考えたこともなかった私自身の日本人らしさや日本語の使い方などに気づかされた。つまり、タイの文化・生活・言葉などに触れたときは、その裏返しで、私が日本のそれらに強く根差した存在であるということを実感することが多かった。日本においては、比較対象がないためなかなか気づきにくいことだと思うが、自身を内観するよい機会となった。

**2. プログラム内容について**

平日は基本的に午前・午後の2コマの授業がある。授業内容はタイ語、タイの文学や歴史、チュラ大生との共同発表、実地研修などがある。授業後はチュラーロンコーン大学周辺でご飯を食べたり、観光したりしてチュラ大生と交流を深める。休日は自由行動である。私にとって特に印象深いのは、チュラ大生との共同発表である。私の班は、日本の灯笼流しとタイのローイクラトン祭りを比較したが、単に表面的な共通点や相違点を挙げるだけでなく、それらの共通点や相違点はどのようにして生じるのかについてまで深く考察することが求められ、なかなか難しい課題であった。しかし、そのような課題を考える中で文化比較のおもしろさを学ぶことができた。

**3. 進路への影響について**

今回のサマースクールが、私の進路に直接の影響を与えたということはない。しかしながら、英語で行われる授業において自分自身の英語力(特に聴く・話す)の低さを痛感し、またチュラ大生との会話において彼/彼女らの日本語、英語の語学力の高さを目の当たりにしたことで、専門分野の勉強と並行して語学力を身につけなければならないと思うようになった。また、より長期の留学や海外インターンシップなどを今後の選択肢として検討するようになった。

最後に、今回のサマープログラムに関わった全ての方に感謝申し上げます。ありがとうございました。